

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00410

研究課題名(和文)成長のアンチノミーとポスト帝国のイングリッシュ・スタディーズ

研究課題名(英文)The Antinomies of Development and Post-Empire English Studies

研究代表者

大田 信良(OTA, Nobuyoshi)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：90233139

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文): 21世紀の現在、旧来の英国文学・文化研究とは異なり新たな「英語文学」や英米両国の英語を中心とした「世界文学」が産出されてきているが、本研究は、それらがさまざまに概念化しかつ表象する成長のアンチノミーの問題、たとえば、経済的成長と政治的民主主義との間の対立・矛盾を、第2次大戦敗戦後のポスト帝国という日本の地政学的条件についても考慮しながら歴史化することにより、新たなイングリッシュ・スタディーズのプロジェクトを理論的に探るとともに具体的な解釈を遂行した。換言すれば、既存の「英語文学」や「世界文学」について、「長い20世紀」(G・アリギ)というマッピングにより、より統一的に解釈することを、試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代化以降の資本主義世界を規定したリベラルな国際秩序、経済的自由・政治的民主主義とそれと連動する人間・人材の育成・教育の物語が、その後の大衆化やグローバル化がどんどんと進行する過程で逆説的ながら、その価値観が根本的に挑戦され再考される現在、経済・政治の問題と切り離すことなく文学・文化の問題を全体的・トータルに表象する物語・テキストの解釈をポスト帝国という観点からおこない、英米中心の近代化以降の歴史とりわけグローバル化の文学・文化を、英語教育の問題と交錯するところでもとらえ直し、新たなイングリッシュ・スタディーズを人文学からその他の研究分野に向けて提案・発信したところに学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要(英文): This research project has shown that the present studies of "English Literature" and "World Literature" should be radically re-designed by inventing Post-Empire English Studies in which globally reinterpreting both the antinomies of development, that is, the differences and contradictions between economic development and political democracy has been done more adequately by taking into consideration the geopolitical conditions of Japan as a singular Post-Empire and its English Studies within the mapping of the long twentieth century. In other words, the Anglo-American centrism the present studies of "English Literature" and "World Literature" have ideologically presumed can be critically examined. The particular interpretations has been implemented as follows: first, the works of Rintaro Fukuhara and a bimonthly journal called The Albion; secondly, the various versions of Bildungsroman and the novel of citizenship; lastly, the problems of elitist global English versus popular Art Deco.

研究分野：人文学

キーワード：成長 ポスト帝国 イングリッシュ・スタディーズ 翻訳空間 英語教育

### 1. 研究開始当初の背景

旧来の「英文学」や「比較文学」のようなナショナルな枠組みにもとづく文学研究がますます急速に拡大するグローバル化の進行によって新たに適切な対応を求められる現在、ポストコロニアル研究や帝国論・グローバル化論を踏まえ、さらに、トランスアトランティック/トランスパシフィックあるいは国家横断的なリージョナリズムを志向する研究が、それぞれの地域圏でなされている。だが、そうしたリージョナルな研究は、グローバルな資本主義世界を前提としながらも、それぞれの地域に視点が限られている、また、それぞれの地域圏を総花的に羅列するものにとどまっている。こうした背景あるいは文学・文化研究の閉塞状況を抜け出す可能性は、どこに求められるか、これこそが成長やポスト帝国の問題をグローバルに探る本研究の核心をなす学術的「問い」であった。

### 2. 研究の目的

21世紀資本主義世界の現在、旧来の英国文学・文化研究が対象としてきた「英文学」をすっかり超えて、新たな「英語文学」や英米両国の英語を中心とした「世界文学」やその種々の翻訳テキストが産出されてきているが、本研究の目的は、そうした「英語文学」およびその研究テキストがさまざまに概念化し、かつ表象する成長のアンチノミーの問題すなわち経済的成長と政治的民主主義との間の対立・矛盾を、第2次大戦敗戦後のいわばポスト帝国という日本の地政学的条件についても十分に考慮するようなやり方でグローバル化とその文学・文化を歴史化することにより、新たなイングリッシュ・スタディーズのプロジェクトを理論的に探るとともにさまざまなテキストの具体的な解釈を遂行すること、つまり、既存の「英語文学」や「世界文学」について、「長い20世紀」(G・アリギ)というマッピングにより、より統一的に説明し解釈することを、目的とした。

### 3. 研究の方法

まず、冷戦期の米国文学・文化をグローバルに再解釈するための媒介・翻訳空間としてのポスト帝国日本における英国文学・文化については、20世紀文化空間の「リ・デザイン」の研究を、個人の研究と併行して、日本ヴァージニア・ウルフ協会全国大会シンポジウムの集団的なものも含めさらに展開・拡張し、「長い1930年代」とオクスフォード英文学の研究を、継続し、発表・出版する。次に、インドを含むユーラシアの歴史的・地理的空間に注目し、イギリス東インド会社に注目し直すことで、地政学的に、再解釈し、「20世紀文化空間の「リ・デザイン」」の第3弾として、研究を継続的に拡大していく。その準備として、まずは、第18回東北ロマン主義文学・文化研究会シンポジウム(7月16日)に参加・口頭発表をおこなう。

最後に、ネオリベラリズム批判あるいはthe social turnと呼ばれる英語教育の動向をふまえながら、グローバル/トランスナショナルな philology の歴史化を経たイングリッシュ・スタディーズの理論の構築のために、今年度は、「グローバル・イングリッシュ」の歴史的編制に関する論考を準備する。英国あるいは海外へのリサーチやインタビューのための出張可能な状況になった場合は、英国ウォリック大学の Dr Richard Smith (Reader in English Language Teaching & Applied Linguistics) や Peter Brown 氏とコンタクトへのインタビューを含むリサーチをおこなうが、それが困難な場合は、オンラインによるミーティングまたは研究文献の批判的解釈等々、探りたい。

### 4. 研究成果

冷戦期の米国文学・文化をグローバルに再解釈するための媒介・翻訳空間としてのポスト帝国日本における英国文学・文化については、20世紀文化空間をポストモダニズムあるいはアール・デコと英国モダニズムの複雑な交渉・衝突・ずれを孕んだ重なり合いに焦点をあてる試みをほかの研究者と集団的なプロジェクトにおいておこない、『アール・デコと英国モダニズム—20世紀文化空間の「リ・デザイン」』菊池かおり・大田信良ほか編著(小鳥遊書房 2021年5月)出版した。また、スピノフあるいは第2弾として、『ブライト・ヤング・ピープルと保守的モダニティ 英国モダニズムの延命』高田英和・大田信良ほか編著(小鳥遊書房)

ポスト冷戦期の覇権あるいはマネーとパワーの移動に端を発する歴史的変動・再編のマッピングと歴史化については、「長い1930年代」とオクスフォード英文学の研究を開始し、Marina MacKay 等の Late Modernism およびそれ以降の研究を批判的にとらえるヴァージニア・ウルフ協会全国大会シンポジウムを企画・準備し、その後、追加メンバーとともに、論集からなる研究書・教科書を執筆・編集を進めた。その成果は、論集として2022年度に発表・出版する準備が着々と進行している。

新たなイングリッシュ・スタディーズあるいは現在の英語教育から見直す「英文学」と20世

紀の英語教育については、昨年度につづき、英国出張特にウォリック大学での調査とインタビューが実施できなかったが、英語教育における monolingualism を批判的にとらえる研究と philology を弁証法的にアレンジし組み替える研究プロジェクト、つまり、あらたなイングリッシュ・スタディーズの構築を、ポスト帝国日本の英語教育についての歴史的研究をふまえて、開始することができた。H・E・パーマー / 語学研究所に関する調査・研究も、このプロジェクトに組み込む見通しができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大田信良	4. 巻 36
2. 論文標題 「はじめに モダニティ論以降のポストモダニズム、あるいは、『大衆ユートピアの夢』を『ポスト冷戦』の現在において再考するために」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ヴァージニア・ウルフ研究』	6. 最初と最後の頁 99 - 103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田信良	4. 巻 128
2. 論文標題 ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』と記憶/トラウマ論再考の可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 世界文学	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田信良	4. 巻 13
2. 論文標題 『読むことのアレゴリー』と倫理の問題 / 「エコノミーにおける転換	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋大学大学院言語社会研究科2018年度紀要『言語社会』	6. 最初と最後の頁 40-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田信良	4. 巻 13
2. 論文標題 ド・マン特集 序文「ポール・ド・マンを読むこと/書くこと」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一橋大学大学院言語社会研究科2018年度紀要『言語社会』	6. 最初と最後の頁 8-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田信良	4. 巻 29
2. 論文標題 オクスフォード英文学とF・R・リーヴィスの退場 『グローバル冷戦』におけるポスト帝国日本の『英文学』とロレンス研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 D. H. ロレンス研究	6. 最初と最後の頁 23-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大田信良
2. 発表標題 シンポジウム「ポール・ド・マンを書く - 言語・歴史・ロマン主義」コメンテーター
3. 学会等名 専修大学現代文化研究会第3回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大田信良
2. 発表標題 ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』と記憶 / トラウマ論再考の可能性
3. 学会等名 世界文学会第2回連続研究会：『時代と文学』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大田信良
2. 発表標題 オクスフォード英文学こそがF・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件だったのか? 『グローバル冷戦』におけるポスト帝国日本の『英文学』とロレンス研究
3. 学会等名 日本D. H. ロレンス協会第49回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大田信良
2. 発表標題 “After New Criticism” の、あるいは、(再) 制度化されたモダニズムの、『英文学』・批評理論 転換期・移行期としての『グローバル冷戦』
3. 学会等名 日本英文学会東北支部第73回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大田信良
2. 発表標題 「英国ロマン主義と大衆化されたモダニティのさらなるグローバル化」
3. 学会等名 東北ロマン主義研究会 (TARS ) 第17 回大会シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 大田信良	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 301
3. 書名 アール・デコと英国モダニズム 20世紀文化空間のり・デザイン	

1. 著者名 大田信良	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 366
3. 書名 メディアと帝国 19世紀末アメリカ文化学	

1. 著者名 大田信良	4. 発行年 2022年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 ブライト・ヤング・ピープルと保守的モダニティ 英国モダニズムの延命	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------